

ゾンビと点滅論法と哲学的論争：概説としてのQ&A

Q：いまさらまた点滅論法ですか？

A：「いまさら」とは何ですか。哲学者なら流行り廃りでなく正しいかどうかを考えてください。点滅論法が正しく、ゾンビ論法を葬り去れるならば、その心の哲学上の意義は否定できないはずです。ならあなたは点滅論法が間違っていると思っているのですか？

Q：よく知らないけど、否定されたのではないですか？

A：どうやらあなたも自分の頭で考えるのではなく他人の意見で判断するタイプの人のようですね。まともに否定されていないのに、雰囲気ですらやっつけて葬られそうになっているからこそ我々は抵抗しているわけです。

Q：でも、あなた方の反論は雑誌に掲載拒否されたそうじゃないですか。

もちろん、まともな反論により否定されたのなら、たとえ異論があっても真摯に受け止めるべきでしょう。しかしそれは具体的な箇所についての理性的で論理的な批判や難点の指摘の結果、そうした判断が下された時のことです。はたしてそんな査読が行われたのでしょうか？

Q：おやおや、査読にケチをつけるつもりですか？

それはみなさんに判断してもらったらいいと思います。三浦・柴田（2011）に対し、水本は即座に『討論』に反論を投稿しました。『討論』ですのでたった3ページ弱の議論です。それに対する査読の結果は、6か月以上待たされて、以下の一言でした。

「遺憾ながら、この論文は著者の新奇な主張内容を含んでいる訳でもなく、また、議論が深まっているようにも見えません。」

これが「具体的な箇所についての理性的で論理的な批判や難点の指摘」に基づく査読でしょうか？そもそも、ある論文に対し全くの誤解に基づく反論が出され、それを「完全に誤解している」といった再反論をしたとき、後者を指して「議論が深まっていない」というのはフェアな判断でしょうか？議論が深まらないのはそのようなレベルの反論、およびそれが反論として掲載されたことに原因があるのではないですか？判断すべきは誤りの指摘が正しいのかどうか、ではないでしょうか？そして正しくないと言うならば、どこがどう間違っているのかを指摘すべきでしょう。これは査読者が査読者としてそもそも何をすべきか、ということがわかっていない典型例と言えるでしょう。

Q：でも、こうした暴露って問題じゃないですか？

問題なのは、私の方でしょうか？それともこうした査読がまかり通っている学会の方でしょうか？そもそも私自身も海外の（時に一流の）雑誌から査読を依頼されることがありますが、そのときはもちろん細心の注意を払って読むのはもちろん、たとえ掲載不可の判断でも（当然英語で）何ページにもわたって詳細なコメントを書きます。やはり生産的な批判でないとお互い後味が悪いですからね。

Q：それはあなたがヒマだからでは・・・

ほっとけ。

Q：でも、[水本・前田の新たな論文](#)も掲載されなかったようですね？

[この査読も残念ながら、論文の批判以前の理解の問題でした。](#)すなわち、査読者の一人がいみじくも書いているように、「二元論の主流の立場によればクオリアに因果的効力は認められないはずである」、「チャルマーズのような二元論者によれば、クオリアの有無は、[・・・]それに反した前提で「矛盾」を導いても、背理法で二元論を論駁したことにはならない」と書いていますが、要するに点滅論法を「二元論を論駁」する議論だと決めつけて査読しているわけです。点滅論法がチャルマーズのゾンビ論法に対する批判であって、二元論一般（特に付随性さえ否定するデカルト的二元論）に対する批判ではないことは明示的に書かれているのですが、それくらい、もとの論文を読まずとも論文要旨だけでもわかりそうなものだと思うのですが。もう一つの深刻な問題は、この査読者（だけでないが）がそもそもゾンビ論法の目的というものをわかっていないということです。ゾンビ論法の帰結としてのクオリア概念を前提することができないのは当然のことだと思うのですが。もう一方の査読者も、同様の前提でアドホックな反論をしているだけで、我々の議論のどこが間違っているかの指摘になってしまいました。

Q：要するに誰もまともに反論できないから、点滅論法は正しい、と言いたいのですよね？

いやいや、そんな傲慢な話ではなく、未だにまともな論争がはじまってさえいない、というのが不満なだけです。これまでの批判はすべて、水本（2010）の第4節を見ればそこに回答が書いてあるようなものばかりです。その部分に対する反論でなければまともな論争は始まらないのです。ところが三浦・柴田も査読者も誰もまともにその節に反論しようとしなければか言及さえしていないのです。要するに、読んでない、読もうとしない、あるいは読んで理解できない、というわけです。さらに、三浦・柴田の批判は奇妙にも「論理的に」間違っているという主張に固執するばかりで、そうした反論へ至るはるか前の段階に留まっています。しかも、その内実はどうでしょう。

具体的には水本・前田を読んでもらうとして、以下のような論証があったとして、この論証の前提はどれだと思えますか？

- 1) Z (仮定)
- 2) ZならばA
- 3) Aならば \sim P
- 4) B
- 5) BならばP
- 6) Pかつ \sim P
- 7) ゆえに \sim Z

Q：まあ、普通に考えたら2、3、4、5かと思いますが・・・。

S氏によれば、前提は1から6まですべてであり、「ゆえに」この論証は「論理的に」間違っている、のだそうです。さすがに彼も後に誤りを認めましたが、そういう方がそういう「論理」に基づいて、我々を「論理の初歩が全くわかってない」と散々バカにしていたわけです。この学会では、そうした「オリジナルな」論理に基づく批判の方がまかり通ってしまうのでしょうか？M氏の最近の批判にしても、点滅論法が様相論理で正確に定式化できない、というものでしたが、そんなことは様相論理学を学んだ人なら難なくできるはずで、出来ない方が悪いというだけの話です。いずれにしても、査読者は本当にこうした心の哲学以前のレベルの批判をまともなものとして受け取ってそちらの方が正しいと判断したのでしょうか？だとしたらそれはそれで深刻な問題だと思うのですが、そうした誤りについての我々の指摘に対する評価はほとんどせずに、査読者が自分の思いついた点滅論法に対する「反論」を書いているのも問題ではないかと思うのです。査読者は自分の査読する論文中に書かれている内容について論評すべきなのであり、いまさらもとの論文に対する批判をするならば実名で独立に発表すべきでしょう。案の定上で述べたような理解に基づく批判ですので水本（2010）の第4節を踏まえてもいけませんし、アドホックな「言っただけ」の批判に終わっています。少なくとも二人の哲学者が支持し、まともな反論がまだないと感じている議論が、こうしたあまりに皮相な批判で片付けられるとすれば、それは日本の哲学的論争のあり方として見てもあまりに残念なことではないでしょうか。学会は、こうした哲学の論争をやっかいもの扱いしたりはれ物に触るような態度で無視したりするのではなく、むしろ正しく「育てる」べきなのではないでしょうか。

Q：言いたいことはわかりました。でも仮にここまでの主張すべてが正しいとしても、だからといって点滅論法が正しいということにならないのでは？

もちろんです。だからこそこうして「今更」ワークショップを開催するのであり、生産的な批判であればいくらでも、どなたでも、いつでも歓迎したいと思います。

Q：ところでこれってQ&Aじゃなくって単なる対話になってませんか？

もう遅いわ！